

環境文明社会づくり あれこれ (25)

源流 (25)

1990年7月、環境庁に新設された地球環境部の部長に就任。地球温暖化対策に本格的に取り組む始めてしばらく経つうちに、この問題へのアプローチは、それ以前に取り組んだ主要な公害問題とはまるで次元が異なると考えるようになった。最初のうちは、それが何かは把握できなかったが、やがて、これは20世紀型の都市・工業文明、すなわち大量生産・大量消費、そして大量廃棄が生み出した、都市を拠点とする「文明の病」だと考えるようになった。

そうすると、この「病（当時は死に至るほどの病とは考えなかったが）」をもたらした文明の特質を私なりにしっかりと突き詰め、環境破壊を引き起こさない文明とはどんな文明なのかを探求したくなった。温暖化対策の国際交渉に参加し、その都度、国際NGOの活動を近くで見ると、自由で独立して、新たなタイプの文明を構想するためには、政治の意向や組織の論理に縛られる官僚のままでは（現在の官界に比すれば自由度は大きかったが、それでも）難しいと考えるように

なった。その決意を固めたのは、92年6月のリオでの「地球サミット」の終了時である。東京に戻ると直ぐにその旨を上司に伝えたが、上司からは、「政府はこれから公害対策基本法に替えて、環境基本法案の作成にすぐに取り掛かる。地球サミットの成果を受けて新たに採り入れる地球環境関係は、君に担当してもらうので、それが済んでからの話」とのご返事。当然ながら、地球環境対策を新たな基本法に取り込むことの重要性は十分に理解してきたので、上司の意向にすぐに賛同。それから約1年、基本法成立のために奮闘し、成立の目途がついた93年7月に、27年余続けてきた公務員生活にピリオドを打ち、直ちに、まず環境・文明研究所を設立し、同時に「21世紀の環境と文明を考える会」をNGOとして立ち上げるべく、藤村コノエさん、荒田鉄二さんら5人で準備を開始し、同年9月に正式に（といっても任意団体）政策提言型のNGOとして設立した。

それから30年。この間、私たちが何を考え、何をしてきたか、あるいは何ができなかったかは、一号も欠かさず毎月刊行してきた会報『環境と

加藤 三郎

文明』が明らかにしているとおりである。しかし振り返ってみると、このような活動を休みなく継続できたのは、会員や事務局スタッフのご支援とともに、公務員生活での経験、学び、そして優れた先輩、同僚、友人などの人脈の支えがあった故とあらためて気づいた。それで、若き担当官時代から今に続く仕事をあれこれ思い起こし、書き継いで、今回で3年目に入った。

これまでカバーしたのは、20歳代半ばから30代末までの約15年間の要約であるが、この後、環境文明社会に辿り着くまでの後半部分のあれこれにもお付き合いいただければ幸甚だ。この時期には、交通公害対策室長を皮切りに就いた6つの管理職のどのポストにおいても、全力を挙げて取り組んだので、思い出は一杯あるが、とても全部は語り切れない（拙著『危機の向こうの希望』には一覧表にしてある）ので、次回から、交通公害対策、浄化槽を含む廃棄物処理及び環境文明社会に直結した地球温暖化対策を順次語ってみたい。

